

**滝澤:**それでは時間になりましたので、これより教育功績等表彰者の皆さんを囲んだ座談会を開始させていただきたいと思います。私は今回の司会を仰せつかっております高等教育開発室室長の滝澤です。よろしくお願いいたします。

今日は先生方には佐賀大学の教育功績等表彰者ということで表彰を受けられて、誠にありがとうございます。この座談会の目的ですが、そういった教育に関する多くの功績を挙げられた方々の実践を少し伺いしていろいろな質疑応答を記録し、『大学教育年報』にこの座談会の様子を公開させていただいて、佐賀大学自身の教育改善に資することができればという趣旨でございますので、よろしくお願いいたします。

それではこの教育功績等表彰者の座談会は大学教育委員会の主催で行っておりますので、大学教育委員会の委員長であります瀬口理事からご挨拶を賜りたいと思います。

なお、座談会ということですので今後は着席をしてお話をいただくということにしたいと思います。よろしくお願いいたします。では先生、お願いします。

**瀬口:**皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました大学教育委員会委員長を務めております瀬口といいます。よろしくお願いいたします。

あらためてこの度の先生方の教育功績賞の受賞、誠にありがとうございます。大学教育委員会委員長として一言先生方にお祝いと感謝の気持ちを述べさせていただきたいと思えます。

先ほども学長のほうからもお言葉がありましたように、本学の教育の充実と発展に業績、功績を挙げていただきました農学部の藤田修二先生、教育の実践面で優れた成果を挙げていただきました文化教育学部の徳安和博先生、経済学部のラタナーヤカ・ピヤダーサ先生、医学部の分島るり子先生、工学系研究科の西山英輔先生、今日はご欠席ですが工学系研究科の吉野英弘先生、それから工学系研究科の日比野雄嗣先生に対して、心から敬意を表すと同時に深謝申し上げます。

ご承知のように教育は、「教育先導大学」を標榜しております本学にとっては最も重要な事項でございます。しかし教育というのは研究と違ってなかなか成果を目に見えるようなかたちで出すのが難しい側面がございます。こういう状況の中で先生方が万人に認められるような特筆すべき教育成果を上げていただいたということは本当に驚嘆に値するものだというふうに思っております。

特に近年大学教育の質保証ということが強く求められておりますが、その成否は、最終的にやはり直接学生の教育にかかわっておられる先生方の教育に対する取り組みというものが大きく影響してくると言っても過言ではないのではないかと思います。

先生方によって挙げていただきました優れた功績とか成果というものは今後本学の教育の核となって教育の一層の活性化、さらには将来国内外で活躍するような人材の育成につながっていくものだろうと期待をいたしております。

先生方には大変お手数をお掛けいたしますけれども、どうか今後とも今までどおり本学の教育の推進役としてぜひご協力とご指導を賜りますようお願いを申し上げ、甚だ簡単で

すけれども私のご挨拶とさせていただきます。今日は本当にどうもおめでとうございます。

**滝澤:**ありがとうございました。

それでは早速6人の先生方に受賞の対象となりました先生方の業績をご紹介いただきまして、それに対して少し質疑応答等を含めて大学教育の改善等に関して議論をしていきたいと考えております。

それではお手元にそれぞれの表がありますので、その順番に従いましてお話をいただければと思います。では最初に農学部の藤田先生のほうからご紹介をお願いいたします。

**藤田:**もうアドミッションセンター長としての任期は終わったのですけれども、いつもアドミッションセンターの行事等については先生方のご協力をいただきましてありがとうございます。

実は私がアドミッションセンター長に理事のほうからやれと言われたのはちょうど今から5年前ですか、還暦の誕生日だったのです。そのときにパッと言われまして、これも何かの縁かなということですので、お引き受けいたしました。

それまでは全然入試関係はほとんど委員もやったことがなくて手探り状態だったのですけれども、ちょうどアドミッションセンター長にならされてといいますが、アドミッションセンター長に就任しましてすぐに、まず高校の実態を知らないといけないということで、一応佐賀大学にその当時10名以上受験生を送ってきていた高校を佐賀をはじめ福岡・長崎・熊本・鹿児島・大分までも行ったことがございますけれども、そういったところを回りました。

この高校訪問につきまして最初は私と参事の谷川さんと2人で回っていたのですけれども、その後半には、ここにおられます西郡先生に赴任していただきまして、西郡先生と一緒に外を回りました。

やはり大学にいますと高校の実態とかそういうものが全く分かりません。本当に我々はただ受け身で、入ってきた学生の質が悪いとかそういうことを勝手に言っていればいいのです。

ところがそういった高校に行きますと佐賀大学に一生懸命先生方は入れようとしています。それも、それぞれの高校の中では比較的優秀な学生を入れようとしているわけです。その中で我々はそういった高校の先生方の苦勞も知らずに、もう入ってくる生徒の質が悪いとかいうことを言っているのはやはり高校の先生方に対して失礼なのではないでしょうか。

高校の先生は高校の先生なりに少子化の中で苦勞されております。すなわち、それらの高校では、いわゆる偏差値で表した階層というものがずっと下のほうの生徒が入っているわけです。高校の先生自体がそれぞれ高校に入ってくる生徒の中学校区を回っているというような実態を初めて高校訪問の中で知りまして、やはり我々は大学にいて「象牙の塔」といいますが、そういった中で研究だけをやっているのでは駄目ではないかというような

ことで、やはり教育というのもどういった学生がどういう経緯でもって入ってくるのか、そういったことを理解しないといけないということと、入ってくる学生の質が悪いと言う前に自分が出て行って質のいい学生さんをどうやって高校の先生と一緒に呼ぶ込むのか、そこが重要だと思うのです。入ってくる学生の質が悪いと言う前に目的をしっかり持った高校生が入ってくれば質のいい悪いは大きな問題ではないと思うのです。

要するにやる気があってしっかりとやれば質というのは大学4年間で付いていくものだと考えられますので、やはり我々は、ここにお集まりの先生方には若い方が多いと思われまますので、先生方も今後ぜひ高校に回って、ジョイントセミナー等で回ることもありますが、高校に行ってその実態に触れて、その中から自分の志向している学問を面白いと思っている学生、そういった者を一生懸命引っ張り込んでいただくということが必要なのではないのでしょうか。

それにはやはり逆に言えば質のいい学生といいますか、やる気のある学生を取り込むためには我々自身が動いていかないといけないというのがアドミッションセンター長をやって高校を回ったときの実感です。

幸い西郡先生はこういった入試の分析の本当の専門家です。そういったところで西郡先生の分析とか、そういう助けを借りながら我々自身がやはり入り口から出口までということで、入り口のほうをしっかりとやっていただければなというのが実感です。

こういうアドミッションセンターでの活動について表彰を受けるというのはちょっと面はゆい感じなのですが、先生方にも先ほどから申しますようにしっかりと質のいい、「質のいい」と言ったら語弊がありますけれども、やる気がある学生、これをいかに佐賀大学に取り入れるかというものをもう一度問い直していただければということで、ちょっと説教がましくなりましたけれどもお礼の挨拶ということにいたしたいと思います。

**滝澤:** どうもありがとうございました。

藤田先生にはアドミッションセンターでは最初のときの設立にかかわっていただいて非常にご苦勞されたのですけれども、そういった高校訪問というのは現在のアドミッションセンターの活動の中にずっと引き継がれていっていますね。

**藤田:** 一番重要なやはりアンテナです。アドミッションセンターを維持するためにはやはりアンテナを張って、高校生がどういうことを要望して希望しているのかを知ることが重要です。そういったことは高校に行かないと分かりません。

しかも進路指導の先生等と直接話して先生方の本音を確かめてみないとはいけません。なかなか公式に訪問するだけでは駄目なのです。校長先生と会うのも駄目で、やはりその1つ下といいますか実際の窓口になっている先生、すなわち進路指導の先生や学年主任の先生と話し合いをやるのが重要だろうと思います。

その辺はさっき言いましたように、西郡先生は入学試験方法等に関する本当の専門家です。それが彼の研究分野の一つでもありますので、今後ともそういった分野というのが彼の研究の中で発展していくのではないかと考えています。

**滝澤:**その他、アドミッションセンターの活動等に関して何かご質問等がございましたら、先生方からもご質問をいただければと思います。

日比野：僕はジョイントセミナーの存在はちょっと疑問視をしていますが、これはもうやめたほうがいいのではないかと実は内心思っているのです。あれは我々から提供して行っているのですが、同じことをやるにしても高校側からそれこそ謝金を出すから来てください、的な感じで行くのだったらまだいいのです。けれどもこっちからメニューを出して向こうの指定した時間に行くのは佐賀大学に人を呼ぶことになっているのでしょうか。

数学の話をする数学理科学科に行きたい人は興味があるでしょうけれど、そういう生徒でも佐賀大学に行きたいわけではないのです。こういうのをわざわざこっちが自腹というか自分たちから提案してまで行う必要があるのでしょうか。

**滝澤:**ジョイントセミナーは最初の立ち上げも先生のときにやられましたね。

**藤田:**ジョイントセミナーにつきまして最初はいろいろ試行錯誤をしたのですが、一応最初はこちらからジョイントセミナーの希望はありませんかということで、希望のあったそれぞれの高校に大学の先生が行って適当に佐賀大学の宣伝をするということだったので、最近はやはりそれでは駄目ではないかと考えました。たとえば大学側が数学なら数学でいいですが、そういったものに興味のある学生、そういう者を佐賀大学に引き入れるためには、本学のそれぞれの学科とかでその学科を特徴的に表すメニューを出していただき、そのメニューを希望する、生徒さんに聞かせることにしています。

そしてその中から佐賀大学を1人でも2人でも受験していただければ、要するに経済効果としては先生方が1人行かれました受験生の受験料収入として入ってきます。そういう意味でははっきり言わせて2人の受験生を確保すれば十分ペイするわけです。ですから、そういう感覚でジョイントセミナーを実施しています。

すなわち、アドミッションセンター長として在職期間が長くなるにつれて営業感覚がだぶ出てきて、やはりジョイントセミナーで高校に行ってその学校から2人受験してくれれば、先生方はほとんど自腹とおっしゃいましたけれども一応、最低の旅費とかそういうのは出していますので、その支払い部分はペイするわけです。

ですからそれでいいのではないのでしょうか。それでも自分の興味のある学問に対して1人でも2人でも引っ張り込みたいというような感覚でジョイントセミナーに行っていたければなあというふうに考えています。

**滝澤:**ジョイントセミナーもその形式は段々年々変わってきていますし、最近では一応こちら側の用意できているメニューを示して、高校のほうからこれをお願いするというようなことでやっています。

**藤田:**今はですね。

**滝澤:**ミスマッチがなるべくないようなかたちには段々進歩してきていると思います。

その他はいかがでしょうか。

**西山:**私はちょうど今高校生、大学入学した子供がいるのですが、私の子供の友達の

お父さんお母さんと話をする機会があり、大学を決めるときに誰が決めるかという話題になりました。親御さんたちの話を聞いていると、最終的には誰が決めるかというやはり親なのだと認識させられました。親と子供の話し合いで進路先を決めるのはやはり親となると、親に対してそういう佐賀大学はどういうところからアピールの必要性があるのかなと最近思っているのですが、どうでしょうか。

**滝澤:** その辺、西郡先生はどうですか。

**西郡:** 親に対しての説明会は、頻繁に行っています。最近も週に2, 3回PTAが大学を訪問され、こうした保護者たちに対して説明会を行っています。また、高校で保護者向けに説明を行ってほしいという要望があれば、もちろん足を運んで説明会を行っています。まさに、保護者が入試広報の大きなターゲットになっています。

**滝澤:** 今のところ先生方が直接行ってということはないけれども、組織としてそういったアドミッションセンターの活動として含まれていますか。

**藤田:** ただ、私が高校に行って進路指導の先生等と話している限りでは、先ほどの親が決めると言いましたが、進路の決定に関しては親の意見よりも進路指導の先生の意見に従うほうが強いみたいです。言い換えますと進路指導の先生が本人の進路に関する意見を親に言って、それから進路を決めるというのが非常に大きいような気がしました。

**西山:** 私は親と話すチャンスが多いのです。

**藤田:** 私はあまりないですけども。

**西山:** 私が、受験生の親と話しているときには、どこがいいだろうと親同士で話し合いをしている、というのを聞いたことがあります。親が決めるというときも、高校でもそういった話をされているのです。中学校、小学校の時期から親へのアピールが大切かなというのを聞いたことがあるのでどうなのかなと思いました。

**日比野:** そういう意味では佐賀大学は国立大学ですから、ネームバリューで知らなかったということはないわけですね。

**西山:** 佐賀大学へ行くところに行けるのか、どこに就職できるかという話を今はしています。

**滝澤:** そうですね。最近はまだ入学しただけではなくてその先が段々重要になってきました。

**藤田:** そういった意味では医学部なんかは医学科にしても看護学科にしても目的がもうはっきりしてきますから非常にやりやすいとは思っています。

ただ、我々の学部も例えば教員免許を取れますよということでやるのですが、入学した学生のうち免許を取るのは本当に一部です。数理科学科とかは結構多いと思うのですが、農学部なんかでは免許を取るの1割もないというようなところがありますので。

**日比野:** 数理科学科では教員免許を取る人はたくさんいますけれども、教員採用試験に合格しないのです。

**藤田:** やはり資格とかそういうものも一つの学生募集の手掛かりにはなると思います。ですから職業予備校ではないですけども、大学自身ももっとそういった資格というものに対してもある程度考慮する必要があるのかもしれないですね。

**滝澤:** よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

それでは続きまして文化教育学部の徳安先生のほうから自己紹介を兼ねまして少しお話をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

**徳安:** 教育に関してですか？

**滝澤:** 教育に関してです。表彰の対象となりましたことに関しましてご紹介いただければと思います。

**徳安:** 文化教育学部の徳安と申します。本日は本当にありがとうございました。

教育に関する話の前に、先ほどの就職の絡みで少しだけ言わせていただくと、私はこの卒業生ですので、同窓会の仕事もさせていただいています。美術・工芸教室同窓会では、3年に1度、卒業生全員対象の同窓会を行っています。今年がその3年目でありまして、同窓会を開くにあたってどうするかという会議、名簿の整理、そういったことでバタバタしているところです。

美術・工芸教室同窓会には各学年に学年幹事さんがいます。そこにまず話を振って、その学年幹事の方々から自分の学年に連絡をとっていただいて情報を集めるというシステムがあり、これは私が本学に入学する以前からずっと続いていて、データは蓄積をされて続けています。

今回の名簿作成に関わっては、全卒業生の中でどれほどの方が教員に就かれたのかとか、どれほどの方が自営業をなさっているのかという情報をもう1回洗い直してデータ化したかと思っています。個人情報保護の観点から、情報を提供していただくのにも気を使いますし、2,200人もの卒業生がいるものですから1件、1件のデータをまとめるのは非常に大変なのも事実です。しかし、それが完成すれば今後入学してくる学生さんたちにとっても就職を考える際の資料として有効に使えるものと考えています。

では、教育の話に変えたいと思います。私は彫刻を中心に指導をしているのですが、美術・工芸課程に入学してくる学生であっても高校で彫刻を習うことはほとんどありません。彫刻の経験はゼロで入学してきて、1年目に彫刻の授業を受けて興味を持った学生が専攻するのが主流です。ですから、受講者に対して私が心がけていることは、教員になって人に教えられるぐらいの最低レベルのことは3年間のうちになんとか教えなければいけないということです。学生さんにも「次は自分が人に教えるつもりで聞いてください。」と授業中によくいっています。

彫刻で使える教室は1つだけですので、その中で粘土をこねる仕事、木を削る仕事、石を彫る仕事、そんなにたくさんのはできません。ですから今はそれらの基礎になる粘土の仕事を中心に教えています。それが教職に就いてからも一番融通が利く材料のものでもあるかと思っていますのでそういう仕事をしています。現在、専攻生は15人ぐらいおります。部屋が狭いので、全員が同時に仕事をすることはできません。時間を区切ったり、スケジュールを緻密に調整するなど、いろいろ工夫をしながら作品制作をしています。

恵まれすぎるよりも少し抑圧があったほうがエネルギーがたまるのかなと思ったりもし

ていますが、それ以上にうちの学生はいろいろな方面で頑張っています。

私は今日のお昼は大学会館の食堂で食べたのですが、学食でうちのゼミの学生に会うことはありません。彼らは食費を節約して製作費などを捻出しているようなのです。

お米を自分で炊いてタッパーに入れてちょっとおかずを添えるというか、「今時？」という感じがするかもしれませんが、苦学をしている学生が非常に多いです。

ですからこちらに紹介していただいているように「全国の公募展に多数の入選、入賞」と書いてありますけれども、これは彼らの日々のひたむきな努力の結果にほかならないと言えます。例えば東京の公募展に出品するために作品をトラックで送りますと、行ってから帰ってくるまでに彫刻はかさが大きいですから3万3千円掛かります。作品自体を作るために2～3万円掛かります。これで入選したとなれば東京の展覧会を見に行かなければいけませんので4～5万掛かるということで、1回の展覧会につき結構支出をするのです。

普段食費を節約している学生がそれだけのお金をポンと出すというのは本当に大変なのはわかっているので、私は、自分のメリットと釣り合わないと思うなら出さんでよかよとしょっちゅう言っています。それでも毎年出品者がいるということは、逆にそういう節約のような努力をしているから知らず知らず身が入るといいまいしょうか、目標が見えてくる状況を生んでいるのかなと想像していますし、とても頼もしいと思っています。

大半の学生さんにはそういう意欲を感じられますので、どういう方面の支援ができるのか、お金の援助はできないので何とかいろいろな方法を駆使して彼らの手助けをしたいというふうに今は思っているところです。

**滝澤:** どうもありがとうございました。

徳安先生は美術関係ということで大学の中ではかなり特殊な領域ではあるのですが、そういった意欲のある学生が多くいるということで他学部のほうから見ると意欲のある学生、意欲を持たせることに汲々としているところがあります。どうしてそんなふうが集まってくるのかなという気もするのですが、そこら辺はやはり美術という特色のせいでしょうか。

**徳安:** 活動すると作品が形として出来上がり、目に見えますから、意欲がない学生も仲間がやっていることがいやでも見えてしまうという事はあるでしょう。佐賀県内の展覧会とか、自分たちでするグループ展などというのはやはりもう否応なく見えてしまいます。自分は何もしていない、これでいいのかと思うこともあるでしょうし、われわれは制作をするのが当たり前という伝統といいまいしょうか、なにはさておき仕事をしないと始まらないというのは分かっていると思いますので。特色といえば特色かもしれません。

**滝澤:** 学生のほうも1年生のときからそういった作品の制作とかにもう取りかかっているというわけですか？

**徳安:** 早い学生は1年生から自主制作します。美術・工芸では1年生のときに美術・工芸領域の基本的な事を学ばせて、2年次からの専攻教室の選考のヒントになるよう工夫しています。ですから専攻生として制作が本格的に始まるのは2年生からです。

ただ、例えば高校の頃に彫塑をやってみて面白かったからもう彫塑を専攻するつもりで佐賀大学を受験したのだという学生さんが、入学後すぐに教室のドアをたたくこともあります。

**滝澤:**先生には昨年度ですけれどもラーニングポートフォリオのチューターのほうでも随分ご苦勞をお掛けしましたが、ああいったシステムを先生は実際にやられてみていかがでしたでしょうか。

**徳安:**カメラが回っていますので。

**滝澤:**いいえ。そんなお気になさらず、どうぞ。

**徳安:**学生さんにはせっかくするのだから役に立てるようなやり方にしましょう、そういうことを最初に言います。できるだけ簡単にできるところは簡単にしましょうという話をしました。昨年はちょっと事情を分かっていなかったのがで新生 30 人を私 1 人で面談することになって大変な時間がかかってしまいました。これは無理だと思い、講座の先生方と相談して、今年は全教員で分担をして、分担学生の人数がなるべく均等になるように変えました。

実践してまだ 2 年目です。ラーニングポートフォリオのチューターとして携わった学生さんはようやく専攻を決め、活動を始めるころなので、そういう子たちがポートフォリオをやっていない学生さんとどう違うか、まだちょっと分かりません。

**滝澤:**他に何かご質問等ございましたら。

**諸泉:**このところ美術・工芸課程は徳安先生をはじめ若い優秀な先生がいっぱい入ってみえて、それとともに学生のいろいろな業績がかなり急激に上がってきたわけですが、これに非常な驚きをもって見ておるところで。

先ほどお伺いしますと確か彫塑というのは、これまでまだ経験したことのない学生が入ってきます。3 年ぐらいで日展等に入選させていく、これには何かコツか何かがあるのですか。全く未経験の学生に意欲と技術を伝えていくという。

**徳安:**ほんのちょっとした違いは確かにあります。そこが分かればぐんと伸びるといふところはあります。具体的なことは今年美術・工芸の教員が集まって出版させていただいた『美のからくり』という叢書のほうに書かせていただいているのですが、そこが分かってくれば展覧会でちょっと差を付けることはできます。例えば水泳でいうところのタッチの差といいますか、それぐらいの違いしか出せないとは思っていますが。

展覧会が目的かというところもそういうわけでもなく、やはりそれぞれの学生にそれぞれの成長をしてほしいので、あまり画一的に型にはめるようなことはしたくないです。

ですが、仮に展覧会の枠で考えた場合はやはりせっかくそれだけのお金のアルバイトをしたり、食費を切り詰めて捻出したりして挑戦してくれるわけですからやはり結果は出して欲しいので、技術面の指導はしますけれども、それ以外のものについては本当にほったらかしといひましようか、自由にやっいていいよという住み分けを私の中ではきちんとしていくつもりですし、学生にもそういうふうになんと言葉で伝えています。

**諸泉:**佐賀は博物館とか美術館のほうは彫刻がいっぱいあるのですね。古賀さんとか。佐賀は彫刻という意味ではかなり伝統を持っているのですか？

**徳安:**古賀忠雄先生はもう日本の 10 本の指に入るような彫刻家でいらした時期がありますし、非常に希有な方だと思います。そういう伝統が脈々と続いているかというところというわけではありませんけれども、なかなかいない人材です。形もそうですけれども、非常に特有の形、形態感を持たれた彫刻家だと思います。日本芸術院クラスの非常に素晴らしい彫刻家です。

**滝澤:**どうもありがとうございます。

では続きまして経済学部のアタナヤカ・ピヤダーサ先生に国際交流という面を通して教育のご報告に関しまして、少しご紹介いただければと思います。よろしくお願いします。

**アタナヤカ:**経済学部のアタナヤカです。今日は経済学部の国際教育のあり方とそれに関する学部の国際交流活動についてお話をする機会を頂きまして誠にありがとうございます。

私は平成元年に佐賀大学経済学部の教員として就職しました。本学に就職してもう 23 年ぐらいになります。就職した当時は佐賀大学にあまり外国人教員はいませんでした。私は、その頃から専門として学部・大学院生にアジア諸国の経済発展に関する諸問題と日本アジアとの経済関係、特に輸出入関係、日系企業の海外投資関係とアジア諸国の経済社会発展に対する日本の政府開発援助について教えてきました。おそらく佐賀大学経済学部でアジアについて教えるようになったのは私が最初だと思います。なぜならその頃、佐賀大学はアジアの研究についてあまり興味がなかったからです。また、アジア経済社会について書かれた文献もほとんどなかったので時々北九州の国連図書館まで行ったこともありました。

そうして始まったアジア経済のこれまでの教育研究をもとに予測したことは、やはり間違いなく将来はアジアの時代になるということでした。別の言葉で言えば、現在欧米諸国に集中する世界の成長センターは、長期間で徐々にアジアへシフトするのは間違いのないことです。そのため、私は教員として本学部の学生のために、あるいは日本とアジアの人々のために何が出来るのかを考えました。そこで得た答えは、アジアの経済社会について日本の学生や地域社会にできる範囲で実証的に教えるということでした。簡単に言えば、佐賀大学の教育の国際化の発展のために貢献する必要があると考えたのでした。

まず、そのための一つの方法として考えたのは、日本人学生の短期留学派遣でした。初めて経済学部の学生を文部科学省の奨学金に推薦しました。事務職員の方の協力のもとで行われた学部学生の第一の推薦が文部科学省によって許可されました。そこから始まった日本人学生の海外派遣をずっと続けてきたのです。これはもちろん経済学部だけではなく、文化教育学部・農学部・理工学部の学生に対しても、昨年までずっと海外協定大学に派遣するために様々な方法で協力してきました。日本にとって、また、アジアにとって日本人学生の海外派遣は非常に重要だと私は信じています。なぜなら、「日本経済が安定した強い経済」として発展するためには、日本人学生の海外派遣が最も重要だからです。そのため

に、最良の方法として考えたのは、今まで佐賀大学が長年実施してきた協定大学の協力のもとでの日本人学生の長期・短期留学プログラムです。留学することでその国の経済や文化、教育、大学生の勉強の仕方、宗教、習慣などを目で見て短期間で経験しながら学ぶ事が出来るわけです。

しかし、学生の海外派遣はそんなに簡単なことではありません。留学先の大学での受け入れに必要とする手続は非常に困難で、時間をかなり要します。学生の履歴書作成から飛行機に乗るまでの様々な手続をしてあげることも必要です。また、学生の安全が第一ですので、受け入れ先の送迎や学生寮などの状況を確認する必要もあります。このように非常に時間がかかっても、教員として日本社会が期待する人的資源育成に少しでも貢献するのは我々の義務だと信じ、この20年間学生派遣を楽しく行ってきました。

この事業から得られる最上の喜びだと感じられることは、留学した多くの学生が日本の有名な大学の学生に負けない一流の民間企業社員や公務員になっていること、そして留学中に小さな問題すら遭遇することがなかったということです。この20年間で経済学部では約200人ぐらいの学生が海外に短期・長期で留学しました。昨年、経済学部は、留学経験を持ち、卒業後、日本の様々な機関に就職したOB・OG学生から、アンケート調査を実施しました。特に、学生たちがどのようなところで働いているのか、留学中どのような経験があったのか、留学が良かったのか、現在の活動に貢献しているのか、などについてアンケート調査を行いました。この調査結果については、今年3月にまとめて報告書として出版しましたので、時間がある時にご覧になってください。図書館にあると思います。

また、留学することによって学生に夢を与えること、あるいは希望を与えることができることがわかりました。帰国した学生は全く違った考えを持って帰ってきているのです。帰国した学生の多くは優良企業等に就職し、また欧米諸国の大学院に入学する学生もよく見られます。このような彼らの多くが、「教育の国際化」が最も重要であるという点をよく理解しているようです。学生のそれらの希望に叶えられるようにと経済学部が導入したのは、「国際交流実習」という科目です。もちろん普通の授業科目ですので、行く前に学生にテーマを与えて、このテーマについて国内で調査をし、それらを日本語、英語両方で発表し、それから海外の大学へ行き、そこの学生の前で英語で発表してもらいます。その後、訪問先の大学の指導のもとで同テーマについて調査をし、帰国後、佐賀大学で発表することと同時に経済学部レポートを提出することも義務づけています。2年前からこの科目はJASSOから認められ、今年も20人の学生が一人当たり8万円の奨学金を得て国際交流実習を実施しました。さらに経済学部も一人当たり2万円の支援をしてきました。

この他にも、私が3年前から実施してきたものとして、地域社会の国際化のために「社会人国際交流実習」という名目で社会教育、いわゆる公開講座を行いました。それは、「みんなの大学」という公開講座で勉強している社会人の方々20名を協定を結ぶアジアの大学に約一週間の研修を通じて訪問させることです。社会人の方々も一般学生と同時に4～5人のグループで事前研修を行い、それについてさらに訪問国での研修を受けます。これまで

の3年間の研修では「社会福祉」というテーマで韓国、台湾と中国で実施しました。各訪問国では、高齢者の問題をどのように解決しているのか、また、どのような社会福祉制度があるのか、地域社会、または、政府がどのような政策を導入しているのかについて学びました。帰国後、研修で学んだことについて発表会も行なっています。

このように私は、できる範囲で学生、または社会人に対して、アジアを理解できる機会を作ってきました。このような活動を行わない限り、日本経済は間違いなくどんどん小さくなって行って、学生の働く場所がなくなるような状態になってしまうのではないのでしょうか。アジア人と競争できる人的資源育成と相互理解を中心とした国際交流の発展が一番重要だと思っています。

最後に申し上げたいことは、残念ながら佐賀大学ではいまだにアジアが興味深い研究教育対象として取り上げられていないことです。具体的に言えば、「アジアに行って何を学ぶのですか」、「何の役に立ってますか」という質問をする先生方も委員会の中におられます。そのようなことから分かるのは、アジアのことについて日本人がいまだに興味がなく理解も浅いということです。日本人学生の海外派遣は留学生の受け入れと比べて本当に少ない状態です。アジアよりヨーロッパに行ったらいいじゃないですかとも言われます。

アジア研究をやっている人間として私自身が言えるのは、ヨーロッパからも学ぶことがあるのですが、アジアからはもっと更に多くのことを学べるということなのです。アジアのことを学ばない限りは、将来日本はアジアの経済の中で生き残ることが非常に難しいのではないかと感じます。話が長くなり、申し訳ありません。

**滝澤:** どうもありがとうございました。何かご質問等ございましたら、どうぞ。

先ほど少し派遣した学生からのアンケート調査をやられたということでしたけれども、やはり実際に現地に行ってそういったことをした学生と、そうでない学生というのは明確な意思、意欲に差が出ますか？

**ラタナーヤカ:** 大きな差が出てきます。帰ってきたら全く違ったレベルの高い意識や考え方を持つようになります。もう少し海外で学びたい、もっと海外に行きたい、あるいは海外に関係ある仕事をしたいなどの希望が多いです。

**滝澤:** それはプログラムとしては1週間ぐらいですか？

**ラタナーヤカ:** 1週間程度です。

**滝澤:** 1週間程度ですか。それでも十分なそういった効果があるという。

**ラタナーヤカ:** 海外研修は1週間ですが、事前研修などを考えると1年間分に相当する科目になります。それは、毎年提出している「国際交流実習最終報告書」を見れば簡単に理解することができると思います。参加した学生から長期間留学の希望がよく出ています。

**滝澤:** 留学ですか。

他は何かございますか。どうぞ。村山先生。

**村山:** 単純な質問で恐縮なのですが、アジアなんかでメガシティはものすごく衝撃を受けるような発展をみせるようになってきていると思うのです。

先生はもう 20 年佐賀にお住まいだということなのですからけれども、その着任された当時と今では学生さんの反応というのは全然違ったものになっているのでしょうか。学生さんの反応を直接窺える機会がなかなかないのでお聞かせいただければ幸いです。

**ラタナーヤカ:**20 年前は留学させようと思っても非常に難しかったです。本当の意味で留学したい学生しか出てこなかったからです。一番難しかったのは、学生の留学希望について親に納得してもらうことでした。けれど今は留学したいと思っている学生が多くなっています。また、親もあまり反対しない状況です。残念ながら留学希望者に対し、彼らが安心して海外派遣を実現できるような、彼らをサポートする環境（例：返済なしの奨学金、授業料免除、単位互換制度など）があまり進展していないのも事実です。

**滝澤:**大学としても今度、学生の国際交流の予算獲得に向けた動きも最近は多くあるのだと思いますけれども。

**諸泉:**私はずっと文化教育学部の国際文化課程にいたのですが、確かにおっしゃるように学生も先生方も留学といったらもうヨーロッパ、というような意識は強いですね。恐らく、見ていたら全学的にもやはり日本人の目というのは欧米のほうには強く向いています。そこから辺は何が一番大きな障害になっているとお感じですか？

**ラタナーヤカ:**私が感じるのは、多くの先生方は、まだあまりアジアのことを理解していないと思います。特に日本とアジアの経済関係をほとんど分かっていないのではないのでしょうか？ 現在、日本とアジアとの輸出入関係は 60 パーセントになっています。日系企業の海外直接投資を見ても、やはりアジア向けの企業活動がトップになってきており、ヨーロッパやアメリカとの経済関係が段々小さくなってきているのが現状なのです。しかし、その現実をほとんど理解せず、あるいはその事実をほとんど教えていないのではないのでしょうか。

また、我々の頭から「経済大国」、あるいは「指導者」というプライドを頑なに切り離す事が出来ないのではないかと思います。そのため、「意識改革」は必要だと思います。アジアの人々は日本から多くの事を学んだと思います。アジアに行ったらどんな小さな国でも日本語ができる、日本文化が分かる、日本人のことを理解できる人が多いです。しかし、日本の中でアジアのことを分かる、アジアの言語を話せる日本人は非常に少ないです。最後に言えることは、日本を含めたアジア太平洋地域の平和的で豊かな経済発展のために、アジアのことを理解できる、アジアの競争に直面できる人的資源育成が、今一番日本にとって必要なことなのです。

**諸泉:**私もそう思います。ありがとうございました。

**滝澤:**よろしいでしょうか。

それでは続きまして医学部の分島先生のほうから看護教育分野におけるお取り組みをご紹介いただければと思います。よろしくお願ひします。

**分島:**私の所属は看護基礎科学講座なので、主に 1～2 年生の教育に携わってしまして、先ほど医学部は目的がはっきりしているという話が出ておりますけれども、中にははっきり

した意見を持たずに入ってくる学生も含まれているので、そういう学生は入ってきてから苦しい気持ちを味わうという経験するので、その辺のことをどういうふうによくこちらに意識を向けて卒業まで、資格をきちんと取れる状況まで持っていくかというのも看護学科の課題の一つかなと思います。

私はチュートリアルで担当している学生と面談するときに必ずなぜ看護学科に来たのかというのを聞くようにしているのですが、自分の意思で来ているという学生が大半ではありますが、親が勧めたからという先ほどの話ではないですが、親に言われてあまり考えずに来たという学生も年々、段々増えてきています。実質を把握しているわけではありませんけれども、そういう学生も増えてきたなというふうに思います。

結局、近親者に実際に医療現場で働いている人がいない学生が圧倒的に多いので、本当に看護師としてどういう能力が求められるのか、どんな学習をしなければいけないのかということを入ってきてから初めて現実を知ることになるわけなのですけれども、それが自分のイメージと違っていたときに、すごく進路に迷ったりする学生も毎年何名か必ず出てきます。

そういう人たちも含めて1～2年の間は主に学内で学習していて、今年も7月に初めて2年生は長期の実習に9日間ぐらい出たのですけれども、その時期を経て3年生の後期に長期実習に入りますので、その前までに基礎を担当している範囲でいかに学生のモチベーションを高めて実習に耐え得る学力、体力とか、いろいろなコミュニケーション能力というのを育てるかというのが、基礎看護学の領域では大きな課題だと思っています。

私が選ばれた理由は昨年卒業した4年生がアンケートで選んでくれたというのが大きな理由なのですけれども。私は先ほども言いましたように1～2年生が主に担当で、このアンケートを書く時期は4年生の卒業時なので、大体基礎の教員は忘れられていることが多いのですけれども、それでも選んでくれたというのは私が普段やっている事が学生の中に残っていたという事なのかなと思います。

私は普段、学生との距離をどう取るかということをすごく気をつけるようにしています。

やはりまだまだ未熟な18～19の学生が多いので、厳しくするところを厳しくし、少しこちらが忍耐力をもって待つということも必要な時期だと思います。学生の中には比較的早い時期から向いていないとか、やれないのではないかとことを言い出す学生がおりますけれども、それを少しずつ勉強する方向に向けるように丁寧にかかわっていくというのがすごく大事だというふうに思います。

もう1つ感じていますのは、看護師は就職してから5年以内に離職する人がすごく多いです。早期離職という1年以内に離職する人が多いというのは一時期すごく問題になっていたのですけれども、就職した後の継続教育というのが重要だというふうに最近思っております。うちの医学部の附属病院の看護婦の研修のほうにも一部かかわっているのですが、就職した後にキャリアパスをどう描いて専門職として成長していくかというところにすごく関心があって現在もその調査をしているのですけれども、卒業後も自分の力で自己学習

していける人を育てるということを少し念頭に置いて普段の教育をしています。以上です。

**滝澤:** どうもありがとうございます。確か看護学科は昨年度でしたか、国家試験の合格率が100%ということで、非常に高い合格率を上げられて、そういう基礎の部分というのをやっておられて大変ご苦労されていると思います。

実際看護婦さんというイメージと現実は随分違うものだと思うのですけれども、そこら辺のギャップはどうやって埋めてやっているのでしょうか。

**分島:** 1年の間に講義とか演習に入りますとこんなことまでしなければいけないのかとよく学生が言うのですけれども、やはり最終的には2年生になって実習に出た段階で自分に知識がないと患者さんに説明することもできないし、患者さんに起こっていることを理解することもできないということが現実問題として突き付けられるので、やはり臨地の実習に出て自覚させられるように持っていくというのはすごく大切なことだというふうに思います。

**滝澤:** 他に何かご質問等はございますか。教育というのは例えば医学部で言えば医学部の病院にいられている看護婦さんを対象の教育をしていくというようなことを考えておられますか。

**分島:** 附属病院は看護部のほうで継続的に教育されているのですけれども、その一部に看護学科の教員が入ったり、他の病院で働かれている方も参加される看護協会の研修に講師として入ることがあります。

**滝澤:** 何か他にご質問等はございませんか。

**村山:** すみません。全く関係ない質問なのですが、テレビドラマなんかを見ると最近のはちゃんと見ていないのですが、看護の専門性を拡大することをよしとするようなストーリー展開のドラマが割とあるというふうなことを聞いています。その影響を受けて学生さんが入ってこられることもあるのではないかと思うのです。それは実際の仕事の中で実現しようとするればより高度な調整を必要とするような時代になることを意味するのではないかと思うのですけれども、学生さんは教育を通してどういうふうに自分自身で適応しているのですか？

**分島:** 今すごく看護婦の資格に関しては変革期でいろいろ新しい資格をつくろうという動きが全体でもあるので、いわゆる薬を処方する力を持っている人、要はナースプラクティショナーという医師の指示がなくても処方ができるような資格だったり、CNS・専門看護師・認定看護師のようにある領域に特化した資格をつくるというのめかなり進んでいっているのです。学生は基礎の間にトピックス的な内容としてですが、そういう講義も受けます。

ただ、学部で4年間教育を受けている間はもうあくまで基礎教育ですので、専門的な資格に関連することは基礎教育の後にアドバンストとしてやる教育です。ただ、将来的にそういうふうに専門的な領域に進めるといえるのは、学生の中ではそういうふうになりたいという意識を持たせる上ではすごくいい刺激になる場合もあるなというふうには思っています。

**村山:**相対性理論を勉強したいと思って入ってきたらかなり基礎的なことをさせられて嫌になったという話を聞いたことがあるのですが、その点はどうですか？モチベーションを維持できるのか、むしろ理想と着実に積み上げていかなければならない部分のギャップにがっかりというようなことは特にありませんか？

**分島:**一部の学生にはそういう学生もいるかなと思います。現実は何もすごく地道な世界です。

ただ、やはり現場に出て患者さんにケアを実際に行うとか、観察をするとか、機械を使っているいろいろなことをモニターしたりするというのは相当学習しないとそのレベルにはなかなか到達しないので、基礎の間はもうそれをできるようになるのが精いっぱいな感じだと思います。意識としては将来的にそういう専門的な道に進みたいという意思を持てるというのは、私が学生だった頃に比べると将来像が描けてすごくいいかなと思います。

**諸泉:**よろしいですか。最後にお話をいただいた就職後のケア、これは私も非常に重要だと思っています。これをやる場合に何を、どういうことをやるのが重要だとお考えですか。

**分島:**特に看護師の場合は就職した施設によって看護師に求められるものというのがかなり違うと思います。大学病院はかなり特殊な世界なので医師の数も多いですし、ナースはナースの仕事に専念できるという、ある恵まれた環境にあるので、それを極めていくという方向に卒後の教育はなるのですけれども、それ以外の病院だともっといろいろなことを他の職種と協力してやらないといけない状況なので、やはりその組織の目標としていることに沿った卒後教育が必要だなというふうには思います。ですから画一的にはできないというふうに思います。

あとはやはり圧倒的に女性が多い集団なのでどうしても結婚、出産を経て仕事を継続するというのをどう見ていくかということがキャリアの上では大きな重要な意味を持っているので、そこら辺のサポート体制をどうつくっていくかというようなことも含めて考えなければいけないと思います。

**滝澤:**どうもありがとうございました。

それでは続きまして工学系研究科の西山先生のほうからご紹介をお願いします。

**西山:**私は平成元年にまずは教員、技術職員として赴任して私の仕事が始まりました。その当時はまだ大学院を出たばかりで学生とほぼ同じ年代だったのです。最初の5～6年ぐらいは学生に「西山さん」と呼ばれていました。その頃はゼミの終わった後に、飲み会に行きましょうとか、また二次会、三次会に行きましょうと誘われていました。そうこうしているうちに突如「先生」と呼ばれる時代がきて、二次会に呼ばれなくなり、これは困ったなと思いました。

最初の数年のその「先生」と呼ばれる前の時代には、私が担当している4年生の卒業研究や大学院マスターの研究、ドクターの研究と一緒に進める感覚でずっと最初の何年間には研究と教育を行って来ました。このように仕事に就いた最初は何も抵抗なかったのです。年齢的に学生とさほど変わらず考え方や生活感が近かったのでしょう。その後突如二

次会に呼ばれなくなり「先生」と呼ばれる時代がくると、自分の話が学生と少しずつずれてきて、困ったなと思う日がやってきました。

困ったなと思って、では何をすればいいかと思い、1人の学生を見つけてリーダーにしてみました。この学生をリーダーにしてグループ化と言うとおかしいのですが、学生はそれぞれ個々のテーマをそれぞれ持っていますが、ある似通ったテーマごとにグループごとに分けて、その人を長にして組織的に研究できないかと思ったのです。

学生と話を普通にできた頃は、ここはこうだよ、ああだよといういろいろな話をしていましたが、リーダーと学生の研究グループをつくる頃になると私は基本的に教えないことにしました。学生がいかに自分の知識を増やそうという意識になったときにちょっと支えてやるということを始めたら、学生さんたちはそれぞれリーダーを中心としたグループの中で協力し合いながら自分で考えるというような環境に少しずつ変化していきました。

そうこうしながら教育と研究は進んで来ました。2007年、2000年の前期ぐらいになると今度はコンピューターの使い方が上手な学生がいっぱい増えました。図は描ける、式はきれいにきちんと書けるが、日本語が書けないという学生が出てきて、これにもまた困りました。

そこで日本語で、自分の結果を文章化したり口頭発表したりすることを非常に苦手にしてありますが、発想の転換を行って英語での発表を指導してみました。グループのリーダーの人に外国で発表をすることをしませんかということをお勧めしました。さらには、大学院を修了するときは必ず英語の発表を経験することを強く求めました。そのリーダーや大学院の上級生が英語での発表に向けてのより多くの時間をかけて準備をします。その様子を他の学生や後輩がみて、研究成果の文章化や口頭発表の仕方やその準備の方法を学び、さらには日本語で書いたりすることが上手になる相乗効果も生まれています。そういうことを続けていかねばならないと今思っています。

この受賞のきっかけになったマイクロ波の全国大会では、グループ体制でプロジェクトを進めたことで複数のグループが優秀賞を収めることができたと思っています。佐賀大学が総合優勝できるようにしましょうとリーダー間で話して、それぞれのグループでお互いに協力しながら、リーダー下にプロジェクトを成功させました。

ただ、優秀賞をもらいましたが、このコンテストに関しては学生の個々の卒論や修論に直接関係ないテーマだったのです。しかし、こういうコンテストがきっかけとなりグループを組んで一緒にプロジェクトを行った結果こういった賞をいただきました。その年度の学生の研究の質が向上していったというのがよかったところです。

最近もう少し、少し学生に合わせていけないなというのをよく感じます。特に今日3時間目に試験をしてきたが、この方程式を説明してくださいと問いがあると式だけ書いてあり説明がありません。

昔はそういう学生はいなかったのです。式だけ書いてくるのは駄目だということを知らない学生がどんどん4年生とか院生に進級してきますから、そこら辺の対応もどんどんし

ていかなければいけないのかなという気はしております。

やはりそこに何かしら目標、例えば何々賞と何か自分が享受できるような、うれしくなるような、そういうのがないといけない時代になってきたのかなという気はしています。最近私のところはこういうふうになってると思います。

**滝澤:**ありがとうございます。何かご質問等ございましたら。

**皆本:**リーダーは各学年に1人設けるのですか。それとも研究室で1人ですか？

**西山:**場合によります。今年は2人いたらいい、今年は1人でいい、そのリーダーをつくると言うとおかしいですけど、リーダーになるような人材が出てきたときに、とにかく1人以上は少なくとも置きます。

**皆本:**大体何人ぐらいを束ねるのですか？

**西山:**私の研究室では4年生とマスター1～2年で各10名ぐらいいます。そのなかで複数のグループ作り、そこに1人か2人リーダーがいて、そのリーダーの人が中心となって研究を進めます。

そのリーダーが勉強や研究しているところを見てこのグループの他の学生が手本にしているようです。そこの辺がうまくいっているのかなと最近思います。

**皆本:**国際会議に学生が発表しに行くとき、経済的な援助はされているのですか？

**西山:**基本的には企業との共同研究で頂いたお金というのが主になっています。ですからなるべく旅費が安い地域、例えばアジアの各国、韓国とか台湾等で学会が開かれる場合、あるいは、日本で国際学会をやる場合はなるべく多くの学生を、発表させるようにしています。

国際会議に発表しますと、どうしても学生は1カ月ぐらい発表に準備をかけます。それを見ている他の学生も、国際学会発表は、大変なのだと感じているようです。でも私もそういう緊張感があると学生が自然と集中すると思います。

**滝澤:**先生の受賞の理由に、もう1つは小学生への見学会等というのがございましたけれど、そこら辺はどんな点が苦勞された点ですか？

**西山:**私は佐賀の白石の出身で、その地域の小学校のPTA会長をしていました。校長先生が子供たちに実際の今の進んでいる科学技術を見せたいという意向を持たれていました。理科を実践的に教えることが長時間かけてできなくなってしまったのが理由でした。ではお試しと言うのもおかしいのですが、私は電気電子工学科で働いていますので、電子工学科の見学会を開くことになりました。小学6年生、ちょうど卒業する前の2月末に大学のほうに来てもらって電子工学科のいろいろな研究室を見学してもらいました。

そのほかに図書館と情報基盤センター、学食で昼食を食べて、あとは最後に広報の方に来てもらって佐賀大学の案内をしてもらい、質疑応答では、佐賀大学で勉強に幾らお金が掛かりますというのを話してもらいました。次の年から、保護者の方も来ていただいて佐賀大学はこんなところですよ、こういう授業をしています、こういう研究をしています、と紹介し、お子さんをぜひ佐賀大学にという話もしているところです。今ちょうど今年で4

年目になります。今年は佐賀新聞社にもその様子取材しに来てもらっています。「私、絶対佐賀大学に行きます」という感想文を頂いていますので、6年後ぐらいに期待しています。

**滝澤:**それでは最後に工学系研究科の日比野先生のほうから、特に今回は入学前学習をやっていたということが受賞の理由ですので、ちょっとご紹介をしていただけますか。

**日比野:**推薦入学に合格した学生は早めに合格が決まっているから、それから勉強しなくなるのを避けるために問題を出して解いてもらおうということです。eラーニングで問題を出題して解いてもらうということなのですが、結局こういうのは出題しても解かない人はいるわけです。

実際には分野を決めて問題を出題します。微分積分とベクトル、行列の問題を作りました。あとはeラーニングスタジオの人に1週間ごとに「新しい問題が出ました、解きましょう」というメールを出してもらったり、解いていない人には「遅れているから解いてください」という催促のメールを出してもらったりということは事務方に機械的にやってもらいました。こっちは詰まっていた学生の質問に答えるということをしたくらいです。

問題を作るのは、大変は大変で、手間は掛かるけれどそんなに頭を使うことではないのです。というのは高校生の初級レベルですから。それに、以前、皆本先生と入学後の学生に対する微積分とか線形代数のリメディアル問題をeラーニングで作った経験がありましたので、そこから高校生レベルの問題をピックアップして出したりしたので、それはいいのですが、解いてくれるかどうかというのが最大の問題なのです。

今年も推薦入試の合格者に同じように行う予定ですが、一般入試の合格者にも同じようにやらせようという話にもなっています。一般入試だと合格した後に入學するまで、1カ月あるかないかくらいなのが問題点です。去年はそれを3カ月ぐらいかけてやりました。年明けから3月いっぱい、4月頭くらいまで毎週やったのですが、それを1カ月に圧縮して普通の一般入試の学生にもやらせましようと言っているのです。それを学生がちゃんとやってくれるかどうかはやはり課題です。でもこっちとしては、eラーニングですから手間は一緒です。これがうまく機能するといいなと思います。学生にやらせるための何かうまいアイデアがあれば聞いておきたいです。

**滝澤:**実際の学生の質問にも先生が答えられるというようなかたちですね。

**日比野:**そうです。eラーニングのシステムで質問掲示板みたいなものがあるので、そこで出された質問に答えます。

**滝澤:**それは結構たくさんくるものですか？

**日比野:**詰まる度に質問するというタイプの子もいるから特定の学生からは毎週のように質問がありますが、実際にはほとんどの人が質問しません。

**滝澤:**これは工学系研究科の学生に対してですね。

**日比野:**理工学部のです。

**滝澤:**理工学部のほうの学生に対してですね。

**日比野:**一生懸命やった子は成績も上がっているのでやったかいがあったとアンケートに好意的に答えてくれるので、うまく機能すれば他の学部にも同じようにしてもいいですけども。

**滝澤:**なかなかやってくれない学生をやらせるところについては難しいですね。

**日比野:**やってくれない人の中には高校での課題が忙しいのでできませんという人もいるのですが、それでしたら、それはそれでいいのです。こちらは勉強をしないのを恐れているわけですから。

**西郡:**単純な質問なのですが、対象者は他の人がどの程度取り組んでいるのかといった情報は見えたりはするのですか？

**日比野:**それは見られません。

**西郡:**他の人の様子がみえると、積極的に取り組んでいる子の状況を見て、自分もやらなければみたいな競争意識が生まれてくるのではないかと思います。他の大学ではSNSみたいなものをつくって対象者たちが積極的にコミュニケーションを取っているということを目にしたことがあります。

**日比野:**それは、いいアイデアだと思います。

**徳安:**私は今彫刻をしていますけれども、高校3年の7月まで工学部志望でした。数学は分からないところが局部的にポンポンとあって、ここが分からなくて工学部に行ってやっていけるのかなという疑問が漠然とありまして。それが理系進学をやめた理由のひとつになりました。

ですから高校で習う数学が大学に行ってから通用するのかとか、あるいはどういう学習をするからここをやっておかないといけないのかという関係性が見えてくると課題にも乗りやすいといえますか。

漠然と課題をもらうよりは、これをやっておいたほうが大学に来てからつまずかなくていいよという、高校と大学の大きな違いみたいなものを私は漠然と疑問に思いつつも確かめることもせず断念したくちなので、それが分かると少し入りやすいというか気持ち的につながりやすいのかなという気がします。

**日比野:**質問をしてくる学生に関しては何学科の学生かが分かるので、例えば化学科だったら化学でこういうふうにするのでこの問題が必要ですよとか、そういう回答ができるのですが、一般的にこっちが用意するのは何学科ということもないものですから、そういうことがうまく書けないです。そういうのをきめ細かくやるのはやはり個人的に質問をしてくれたりという状況のときぐらいしかないです。

**滝澤:**これはeラーニングですけども、勝手に正解を選ぶタイプのものではないのですよね。

**日比野:**いいえ。そういうタイプです。

**滝澤:**そういうタイプのものになっているわけですね。何か証明をしなさいとか、そういうものではないのですか。

**日比野:**そういうのは、eラーニングの性質上できないのです。間違えた解答をしたときにこれがおかしいとか、アドヴァイス的な説明をフィードバックするのはできるのですけれど。

**滝澤:**化学系でもeラーニング課題を作ったことがあるのですけれども、学生がどう間違えるかというのを予測して、間違える答えを作るのが難しいなと思うのです。

日比野:それはすごく難しいです。それが一番大変なところです。

**藤田:**推薦入学生に対する入学前教育を他の学部拡大する予定というのはないですか？大変でしょうけれど。

**日比野:**基本的にはこれは理工学部の入学生向けに作っているから、これを他の学部拡大する予定があるかないか僕は知らないです。それは僕の知っている範囲ではないのですけれど、広げろと言われればノウハウがあるわけですから、ちょっと難易度を調節すれば、それは可能です。

**滝澤:**今、全学教育のほうで専門基礎のようなものがございますから、そういったところではeラーニングをやると、いかがですか。

**諸泉:**今各学部で考えてもらっているものです。共通専門教育科目というものですが、あれはeラーニングでやられるわけではないですよ。今のところは、これの外部で。

**日比野:**もちろん、違います。

**諸泉:**ただ、授業と授業の合間というのですか、自学自習には極めて有効だという話は伺っていますけれども。

**日比野:**課題として出すのはいいと思いますね。

**諸泉:**この話題はこの間、いろいろな工業高校の先生方の集まりのところにちょっとお伺いしたときにお伺いしたのですけれども、入学前学習はやっていない子とやっている子との差がかなりはっきりと出ています。ちゃんとやっていた学生は後々かなり成績が良くなるとか、そういう分析なんかはやっていらっしゃいますか？

**日比野:**まだ今年始めたばかりなので、そこまでいきません。

**皆本:**たとえば、知能情報システム学科も2004年から事前課題を課していて、正解率ではなくて完答率の悪い学生は8割方留年します。

**諸泉:**(笑)。

**皆本:**ですから正解率はともかく、やってくるかこないかがかなり影響することが過去10年のデータではほぼ見えています。ということは学習させるような習慣を付けさせれば、もしかすると留年率を下げられる可能性があります。

**西山:**習慣なのでしょうね。

**皆本:**習慣だと思います。もしくは入学後の評価が普段の真面目さを高く評価している先生が多いのかもしれませんが。どちらが原因かはちょっと分かりません。

**西山:**習慣については、小学校の校長先生のお話では、勉強する習慣を付けましよう小学校で散々言っているらしいのです。しかしながら、宿題は必ずしていきましようというの

に、やはりしてこない学生もいます。

**皆本:**ですから大学で出す事前課題は入学後のやる気や学習習慣を測定している面があります。

**西山:**そのやる気というのはどこで教育されているのでしょうか。

**皆本:**そうですねえ.....。

**諸泉:**これは難しいですよ。やれと言ってやるわけではないですからね。

**皆本:**難しいです。これは何年間か調べて同じようなデータが出ると、ほぼ信憑性があるものになると思うのですが。

**滝澤:**少子化が段々と進んできた中で昔だったら入ってきた学生にやれと言っておけば済んだのが、段々そういったやる気を引き起こすというようなところも少しずつ大学の教育の中で取りまざるを得ないような状況になっているというところはあって、教育としてはますます負荷が大きくなってきて大変だと思うのですけれども。

eラーニングは問題を作るとかそういったものが1人の先生に集中してしまうと非常に大変なことになると思うのですが、そこら辺は何か分散されるとかそういったようなことは？

**日比野:**実際分担したのですけれども、やはり専門家が1回通してみないと。

滝澤：最終的なところで。

**日比野:**レベルの調整もそうですし、問題の質もそうなのですけれど、だいぶ違います。

でもこれは1回作ってしまえば、全く同じ問題を毎年使いまわしてもいいので、入試問題を作ることなんかには比べれば全然気楽です。

**滝澤:**そうですね。

今日は長い時間にわたりまして非常に多くの発言をいただきましてありがとうございました。昨年と比べても国際交流から各先生方の基本教育での取り組みなど、非常にバラエティーに富んだお話をお伺いすることができまして、どうもありがとうございました。

それでは今日は誠にありがとうございました。どうもありがとうございました。

(終了)